

インド渡航歴40回超!

佐藤良純の No. 14

# インド・釈尊あれこれ紀行

王舎城を歩く「ウォーキングフォーピース」



2016年の「ウォーキングフォーピース」に参加した著者。右から二人目



王舎城巡礼  
(ウォーキングフォーピース)

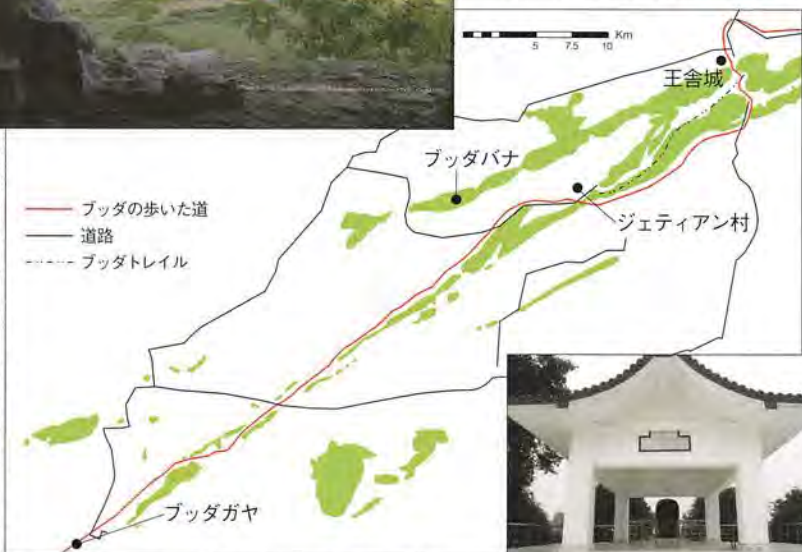
インド渡航歴40回超!

# 佐藤良純のインド・釈尊あれこれ紀行 No.14



## 王舎城ブッダトレイル

釈尊が泊まったブッダバナの洞窟から谷を望む



ジェティアン村にある四国青年仏教会寄進の祠堂



今回は王舎城の南西から北東へ、釈尊が歩いた道をたどる。ブッダガヤからガヤを経て尼蓮禪河にれんぜんがを渡り旧道を北東に歩くと王舎城に入る。釈尊が一夜を過ごしたブッダバナと呼ばれる小さな洞窟は、玄奘三蔵も一夜を過ごした場所で、今でも石の仏像や仏塔の破片が多く見られる。

木の生えていない岩山の中腹にあり、村人以外の人が訪れるとすぐに見つかる。私が訪れた2回ともすぐ見つかり、20〜30人の子供たちが集まった。こうした立地ゆえ、盗掘を防いでいた。

そこから北西に進むとジェティアン村に着く。日本の四国青年仏教会が寄進した祠堂が建っている。村には、釈尊が持っていた杖を地面に突き刺したところ木が生えた、という話が残っている。また、釈尊時代のままの細い小道が村の中を通っている。村人が釈尊や弟子たちに食事、衣料、日用品を布施したに



ジェティアン村での刈り入れと托鉢



違うない。

余談ながら、衣を布施する儀式はカティナ会と呼ばれ一年に一度盛大に行われる。この儀式はインド各地はもちろん、タイ、ミャンマー、シユリランカでも行われる。衣は三衣さんねと呼ばれ、持つと意外に重く、隠しポケットが多く付いている。バンコクには衣、仏像その他の仏具、線香などを扱う店が立ち並ぶ町がある。

王舎城に戻る。現在でもほとんど人が通らない丘の北側の道がジェティアン村から竹林精舎の裏側に通じている。私が訪れた60年前は盗賊が出たので、特に夜は誰も通らない。いまだに人家が一軒もないながら、あの頃よりは安全にはなった。

また、ジェティアン村から王舎城の東西には温泉が点在している。大昔はこの辺は火山帯で、事実18世紀にはビハール州大地震のため、ケサリアの大塔が崩れている。



釈尊、大迦葉尊者の衣交換の像。上部が欠けている



農村に散逸する仏像。合掌供養する筆者

## 佐藤良純

大正大学名誉教授

さとう・りょうじゅん 昭和7年東京生まれ。大正大学同大学院、インドデリー大学院に学ぶ。昭和34年より大正大学で教鞭をとり、教授、学科長を経て、平成14年退職、大正大学名誉教授となる。インドへの初渡航は昭和38年、以来インドへ訪れること、40有余回。著書に『ブツダガヤ大菩提寺』、『釈尊の生涯』など多数。

王舎城を含め仏跡が多数残るビハール州は、インド北部ガンジス河の沿岸に広がるが、その名は僧院を意味するビハラに由来する。ナーランダ大学のデイバック・アーナンダ氏はビハール州内を調査、188の村の農家の庭先や畑の中に仏像や菩薩像が散逸していることを報告している。玄奘三蔵も17の遺跡を記している。

この中に釈尊が大迦葉尊者と衣を交換する像が残っている。ひざまずく姿の頭部を欠く尊者像だが、台座の刻文を読み取れる。ナーランダ大学そばのジュアファルデーには目連尊者の記念塔もあるが、発掘して日が経ち、今では瓦礫に覆われている。そのそばにあるルックミスターナと呼ぶ小さな丘は、ナーランダ寺院が蒙古軍に襲われた時の避難場所であったと伝えられている。